禪と茶道

柴山全慶

一

禪に育まれ、清規的形式と藝術的雅趣とを融合した我國の茶道が、「茶味」なる言葉に表現せられて一般化し、所謂「茶」を知ると知らざるとに拘らず、近古以來日本國民の性格及び教養の一源泉をなしつゝあることは明白である。從つて近時强調せらるゝ日本文化の高揚に際し、その一分野として茶道の認識を新にしつゝあることは當然と云はねばならぬ。

岡倉天心氏はその有名な「茶の本」の卷頭に「一種の審美的宗教卽ち茶道」と定義づけ、更に「茶道の要義は不完全なるものを崇拜するにある。所謂人生といふこの不可解なるもののうちに、何か可能なるものを成就しようとする企であるから。」と述べられてゐるが、不完全なるものに價値的轉換の美を自覺し、不可解なる人生に喜びの可能を成就せんとする日本國民の生活態度には、確かに詩に通じ禪に通ずる床しくも「佗びたる」精神的特性が潛んでゐる。

元來茶道の發生を見た東山時代は、歷史的に平安朝と鎌倉期との兩文化の綜合時代とされてゐる。

平安の文化は感情の優美と感覺の纖細をその特徴として王朝的性格を有し、鎌倉の文化は質實枯淡と直情剛健をその特徴として武士的禪的性格を有すると云ふべきであつて、平安の情緒的性格が鎌倉の直觀的性格に綜合せられて出現した文化形態の一面が茶道であると云はれてゐる。

故にそこには藝術的雅致が、深い意志的氣力に裏づけられてゐなければならぬ事は云ふ迄もない、卽ち「侘び」に現れたる美は、生命の源泉に直接する美であつて、感覺的美と云ふよりは精神的美と云ふべく、南坊錄に

「偏にして物の相具らざる誠に茶の湯の本體なるべし、人として世に偶せず俗に伴はず、調ひたるを好まず、不如意を以て樂み」とある記述も、畢竟そこに通ずることでなければならぬ。且つ最も具體的な生命の輝きは、却つて單純枯淡の中に現れる、そこに禪の生活態度をねらひとした古人の茶に對する道としての主張がある。

私は茲に內容の側より、更に歷史的發展の側より、禪と茶道の一味性を概觀し、特色ある日本文化の一面を描出してみたいと思ふ。

二

宗敎はその發生の當初、直截具體にして常に知識の影の少いことをその特徴としてゐるが、次第に學問的裝飾の複雜化すると共に、理論に流れ概念に傾いて眞の生命を枯渴し去る運命的な經路を

辿つてゐる。そこに一切の教意を却けて最も具體に生命と直接することを主張する神秘派として禪宗の獨立を誘發し、再び生命に直面せんとする必然の動きが生じて來た。

特に祖師禪の端的は、一切の理論的認識を超越して擧手投足に無功用の三昧を行取し、親しく生活と一如するところにある。禪が喫茶なる實際生活の行事を精神化し、道として生命づけてゐる所以は實にそこにある。

南坊錄滅後の卷に於て「趙州を亭主にし初祖大師を客にして、休居士と此坊(南坊宗啓のこと)が露地の塵を拂ふ程ならば一會は調ふべきか」と書かれてゐる言葉は、眞の茶人の作前は禪界の巨人の受用底と異らず、凡人の容易に窺ひ難き一味の境地であることを强調したものと見るべきであらう。主客一如の直觀の上に働く受用三昧の立場よりすれば、趙州禪師も達磨大師も已にこれ「無味の眞茶」に透徹した大茶人と云ふべきである。

直指人心見性成佛、自己一心の上に安心を求めて、相對に神を置かず佛を求めず、何等の祈禱なき禪に於ては、凡ての伽藍の使命特質も自から僧寶(人間)本位であり、道場としての傾向を帶び來ることは當然である。そこに茶室が一種の禪堂としての精神的特質を持つに至つた由來がなければならぬ。

群書類從に收められた喫茶往來に見ゆる「喫茶の亭」の豪華にして享樂的、佗なき茶會の樣子に

較べて、禪僧の墨蹟と投げ入れの花一二輪を床飾りとし、草庵の小間に簡素枯淡維摩居士の禪室を味得せしむる茶道の雅致は、茶席が單なる清雅逸樂の會場にあらずして、禪的向上の道場としての趣向を持つことは、蓋し當然の發展でなければならぬ。

眼を外に向けた概念的知識は、却つて吾々の生活を益々抽象へ抽象へと驅り立てゝ內的生命の鼓動を弱めて行く。無念無想になると云ふことは、論理と認識の桎梏を脱して無我の眞我に生きることである。そこに始めて生命そのものとして眞理が生活に具體される、現實の生活はそのまゝ現實を超えた相として輝く。「威儀卽佛法」「平生心是道」の世界が開かれるのである。

趙州禪師が「喫粥了や未しや、鉢盂を洗ひ去れ」と僧に示された眞意は、着衣喫飯も是れ禪是れ茶の妙趣でなければならぬ。

從つて禪は「直心是道場」である。直下に智的分別を超えて生活に直面し、概念する遑を容さない。そこに却つて切々と生命に撞着し、行も亦禪坐も亦禪としての自覺を體得せしむる教育的作略を藏してゐる。茶人の坐臥進退が自から無賓主の直觀でなければならぬ立場も亦そこにある。宗旦居士がその著「茶禪同一味」の中に

「茶器の扱ひを以て本性を觀ずるは直ちに坐禪工夫の敎なり。坐禪とは靜坐し居るが工夫に非ず、それをば闇證の坐禪とて天台の智者も嫌ひ給へり。故に去來坐立共に行ふが坐禪の要法なれば、茶

事にても此の如く行住坐臥懈怠なく修業すべき事なり。」

と誡めた言葉は、無功用を生活に具體する趙州禪師の教育的作略に通ずる茶道のねらひと云はねばならぬ。

禪が自然を尊重することは、自然を單なる自然として見るがためではない。道元禪師が「正法眼藏」の中に「而今の山水は古佛の道現成なり。ともに法位に住して究盡の功德を成ぜり。」と云はれてゐる言葉と云ひ、蘇東坡の「谿聲卽是廣長舌、山色豈非淸淨身」と云ふ偈句の如きは、禪の自然に對する態度を示すものとして深く吾々の心を打つものがある。卽ち自然は禪者にとつて作佛の勝境であるのみならず、更に飛躍して「水鳥樹林悉皆念佛念法」の淨境でなければならぬ。「鴉鳴鵲噪」も亦これ自己と異らざる境地こそ、禪僧が自然を詠じて特殊の風格を持つ所以であつて、茶席の花に露地の風韻に無限の含蓄と淸雅の工みを留め、どことなく藝術的情趣の匂ふ素因でなければならぬ。

夢窓國師の煙霞の性癖と相阿彌の天才とは、日本造庭史上に一時期を劃してゐるが、「佗茶の湯」と共に出現した茶庭の露地は、その繪畫的構成を蟬脫して無技巧の自然さに山路の幽趣を寫し、更に一段の精神的境地を開いてゐる。「築山庭造傳」に（これは俗書であると云はれてゐるが）「茶人の庭は作りたると見えざる樣に、或は在家市中ながらも山林深谷に入りたる樣に作りなすべし」

とある。作意を留めぬ自然さの山路の情趣は、夢窓國師の本格的庭園に比して、枯淡清雅却つて禪者の心境に通ずる佗びたるものがあると思ふ。

露地を指して「有漏地より無漏地に渡る」心構への象徴と云ひ、席入りの心は「維摩居士の禪室に入る想ひを凝らし」などと云はゞ、禪敎一致の思想の如く理詰めの臭ひが邪魔となり、却つて露地の風趣の自然さを固苦しくする嫌ひがあると云ふべきであらう。

本格的の繪畫とは別に、水墨の淡々たる中に泌み出づる氣韻生動の自由さこそ、露地に味ふ茶人の禪味でなければならぬ。

三

我國に於て茶祖と呼ばるゝ南都の珠光上人は、一休禪師に師事して禪を究めた人であるが、深く茶儀に通じてゐたが爲めに義政公に召し出された時、茶事を問はれて「一味清淨、法喜禪悅、趙州は是れ知己、陸羽豈その佳境に入るを得んや。……此の室に入るものは、外人我の相を離れ、內柔和の德を蓄へ、交接相見の間に至つて、和兮敬兮清兮寂兮、卒に天下泰平に及ぶ」

と答へ、後來有名な茶の四德「和敬清寂」はこの珠光上人の語にその源を發してゐると云はれてゐる。

未だ「佗茶の湯」の完成を見ぬ時代の珠光上人が、已に茶の精神を「一味清淨法喜禪悅」にあり

とし、喫茶去の公案に依據して趙州禪師を茶道の知己と云ひ、支那に於て茶神と崇められゝ陸羽の「茶經」が却つて禪的活機に缺けたることを暗に指摘して之れを抑下し、日本の茶道が遙に陸羽の茶境を超えたる事を意識せる點は、文化史的にも見逃し難い一事でなければならぬ。

形式的な粉飾の多い上流人の生活樣式は、直情枯淡禪的生活に生命を直視せんとする者にとつてむしろ邪魔となる場合が多い、量よりも質に生きんとする者のまづ避けねばならぬ生活である。後來珠光上人は六條堀川に殆めて四帖半の茶室を構へて茶事を行つたと云はれてゐるが、當時貴人の多い上京を避けて下京を撰んだ事と、廣間を避けて小間に集中的作略を試みた點とは、彼が禪者として營んだ茶儀に何等か精神的な意圖があつたに相違ない。そこに御飾式の廣間の茶儀を棄揚した「佗茶の湯」の發生を推斷することは强ち無理ではないと思ふ。

珠光上人の流れを汲む紹鷗に至つて、茶道は益々明瞭にその性格を形成し、佗の精神は漸く茶道を代表するの感を抱かしめてゐる。彼は普通國師に參じて禪を究めつつ「形の外のわざ」なる茶道に精進し、佗の心を

「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ」と定家卿の歌にて示すを常としたと云はれてゐるが、南坊錄に「花紅葉も知らぬ人の初めより苫屋には住まれぬ」と記されてゐることは、彼の佗がある意志的修練の後に至り得る一種の自覺境として見らるゝ處に、一層意義深い參禪の見

地を見ることが出來る。然し彼の茶は未だ書院風の傾向を脱し切らず、名實共に佗の茶道を完成せし者はその弟子千利休であつた。

利休居士はその參禪の師古溪和尚より「予が參拾年飽參の徒なり」と證せられてゐる具眼の人であるが、彼の爲人と豊太閤に仕へた社會的地位等に就ては、今更改めて記述する必要はない。只彼が晩年如何に徹底した茶禪一味の妙境にあつたかを窺へば足ると思ふ。

「返す〳〵茶の湯の深味は草庵にあり、眞の書院臺子は格式法式の嚴重を調へ世間法也。草の小座敷露地の一風は、本式のカネを本とすると雖終にカネを離れ、ワザを忘れ、心味の無味に歸する出世間法也」（南坊錄滅後の卷）居士が廣間の完璧に近い清規的茶儀の莊重さから、如何に換骨脱胎して一段高い精神的境地を求めんとしたかは、並大抵のものではなかつたらしい。

「大德南宗などの和尚達に一向に問取し、旦夕禪林の清規を本となし、彼の書院結構の式よりカネをヤツレ露地の一境淨土世界を打ち開き、一宇の草庵二帖敷に佗すまして薪水の爲に修行し、一盌の茶に眞味あることを漸くほのかに覺え」と云ふ言葉は、涙なくして見られない禪者に優る苦修の跡があると思ふ。

「主客ともに直心の交りなれば、規矩寸尺式法等あながちに云ふべからず、火を起し湯を沸し茶を喫する迄のことなり」と云ふに至つて、居士の茶は古高清澄實に凡人の企圖し難い趣きがある。山

上宗二が利休居士の力量に打たれて「山ヲ谷、西ヲ東ト茶ノ湯ノ法度ヲ破リ、物ヲ自由ニス」と感嘆し、笑嶺和尚が「古來茶人の見解にあらず、禪法の眞味と他事なし」と激賞してゐられることも寔に當然と云はねばならぬ。

利休居士の平明枯淡然も機略に富む禪者も及び難い茶の境地を、更に高踏的に宗教化したる者は利休の孫宗旦であつた。然し彼の茶の境地はその著「茶禪同一味」に見らるゝ如く、徹頭徹尾「茶禪」と云ふよりは「禪茶」であつて、餘りに行き過ぎたる感がある。

茶は精神を尊ぶと雖單なる宗教であつてはならぬ。宗教道德藝術を渾然內に融合して、これを生活に具體するところにその眞價を見なければならぬ。禪に傾き過ぎた宗旦の茶が、藝術的ゆとりを缺くことは、必ずしも私のみの憾みではないであらう。例へば茶禪同一味中の茶器の章に

「禪茶の器物は美器に非ず、寶器に非ず、舊器に非ず、圓虛清淨の一心を以て器とするなり。此の一心清淨を器として禪機の茶あり。されば名物なぞ云ひて世に賞翫する器は貴ぶに足らず云々」とあり。

今日の茶道界の如く、道具自慢を茶事の生命とはき違へたる茶人達にとつて、宗旦の言葉は頂門の一針たること云ふ迄もないが、さりとて「佗たる美」なき「心のみ」の器は、却つて眞の茶人に相應しからぬ窮窟さではなからうか。「道具を生かす」と「道具に捉へらるる」との差は、實に紙一重の處にあり、善惡いづれの意味にも達人に非ればこなしがたい心事であると思ふ。

光悅も鷹ヶ峰に隱栖した時代には、「良器は損ひ破るゝ勞ありて面白からず、粗物を翫ぶこそ安けれ」とて良器を人に與へ、粗器にて茶を樂しんだと云はれてゐるが、宗旦の言葉に較べて、光悅の言葉にはどことなく物心ともに器を超えた眞の茶人の自由なゆとりがあると思ふ。

完成と普及は屢々生命的發展を停滯せしむるきらひがある。禪に磨かれた吾國の茶道も利休宗旦を名殘りとして內容の進步は認め難い。德川の末期に玄々齋が田安德川家に敎へたと云ふ「茶道原意」の如きは、一部の人々が茶の眞意を單なる脫俗と誤解せるを誡め、世間事卽茶道なることを說かんとせる心事を差引くとしても、餘りに禪味なく雅致なく儒敎的道德觀のみを中心とせることは、後代の茶人が利休の「技」を傳へて「心」を傳へる心眼の至らざる爲めであることは云ふ迄もない。

斯經禪師が略茶事訣の中に「遍く探り討ぬるに能く茶理に達して寂の場を會する底一個もなし、相承せる口訣のみにて書物なき故都て亡びたるを知る。」との述懷も、茶祖達の風規を慕ふ者にとつて、實にと肯ける言葉である。

四

然し、元來この「佗茶の湯」の完成を、單に利休居士の豊な天分と性格にのみ歸し得るか否かは一應考慮の必要がある。卽ち國民性と文化との關係である。

長い歷史と高い文化の素地を持ち乍ら、支那の茶道がその國民性に築かれた文化たるに過ぎず、

茶聖陸羽すら珠光上人のために「豈その佳境に入るを得んや」と喝破せられし原因も、實はこの關係に由來する處が多いと思ふ。日本國民の詩的直觀的性格は、日常生活にも美を求め佗を忘れぬ床しさがあり、畢竟利休の優れたる性格も、一面この傳統的國民性の象徴と見るべきではなからうか。

西田博士が日本文化の眞髄を「情的文化は形なき形、聲なき聲である。それは時の如く形なき統一であり象徴である。形なき情の文化は時の如くに生成的であり、生命の如く發展的である。（中略）柳は綠花は紅の大乘佛敎の眞意は、日本文化の如きものに於て見出されなければならない。」（哲學の根本問題續篇）と實に巧みに述べられてゐるが、利休居士の「終にカネを離れワザを忘れ、心味の無味に歸する」佗茶の內容は「形なき統一」の相として、然も「生命の如く發展的」に生活への具體として解する時、始めてその眞境を味得することが出來るであらう。

優れたる國民文化は、深き傳統に根ざした國民性の上に築かれる個性の創造的發展でなければならぬ。然も茶は常に主客の直觀に成立する無賓主の「一座建立」であり、宗敎が屢々文化否定の形相をとるのに對し、文化形成として、社會的なる處に本質的な意味を持つと云はねばならぬ。

偉大なる日本文化の一面としての茶道が、深く禪に根ざして常に形なき統一として生命的に發展し續けることをその本格的立場とすることは、他の「道」なる諸文化部面と共に、禪的日本文化の特色でなければならぬ。